

英語の受動構文について

尾 浜 文

1. はじめに

「受動態 (passive voice)」と対立する概念として「能動態 (active voice)」がある。英語でのその特性として、能動文の目的語が受動文の主語に、また能動文の主語が受動文では *by* 句に対応することはよく知られていることである。しかしその根底には格をめぐる問題、意味役割に関する問題、前置詞 *by* の特性などさまざまな要因が絡み合っている。一言で「受動化」といっても、そのメカニズムは複雑である。本稿ではそのメカニズムについて、*by* 句に焦点を当てて統語的なアプローチをする。その過程で GB 理論 (Government and Binding Theory) によるところもあるが、最終的にはミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) の立場に立って、分析を試みる。

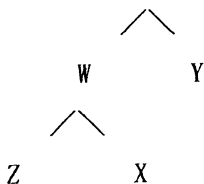
2. *by* 句を外項としない分析

まず *by* 句が文の構成素の中で外項であると考えていない分析の中で主なものを紹介する。Zubizarreta (1985) は *by* 句は副詞句に相当するので次の条件に従うと分析している。

- (1) If *X* is an argument of *Z* and *Y* is an adjunct of *Z*, then *X* cannot be referentially dependent on *Y*. (Zubizarreta (1985 : 256))

[同一指示依存関係に関する制約]

もし *X* が *Z* の項で、かつ *Y* が *Z* の付加語であるという場合には、*X* は *Y* と同一指示を受けることはできない。



これによると (2b) が非文法的なのに対して (2a) が文法的であることを説明できることにな

る。

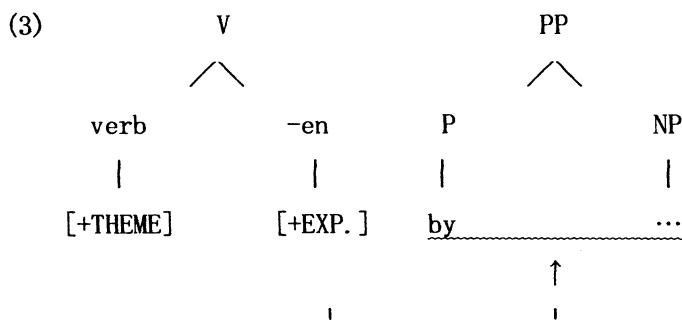
(2)a. Mary talked about his_i mother to John_i.

b. *Mary went to his_i farm with John_i.

(Zubizarreta (1985 : 255))

しかし副詞句と *by* 句には決定的な違いがあるのでこの分析を受け入れることはできない。

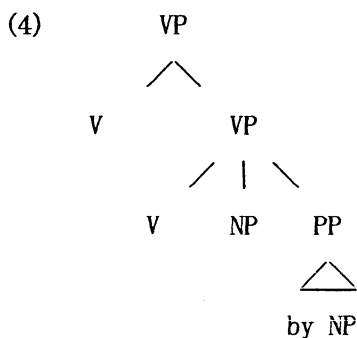
Jaeggli (1986) は *by* 句を受動形態素 *-en* の内項であり、次のような構造で、受動形態素から θ 役割を受け取っていると分析している。



しかし内項と *by* 句にも重大な違いがあるのでこの分析も受け入れることはできない。

Grimshaw (1990) では受動動詞は能動動詞と項構造において異なると論じ、*by* 句を必要とする文があれば *by* 句がなくても非文とならない文もあることから、*by* 句を項付加詞 (a-adjunct) という第三の位置を仮定し、これに相当すると分析している。しかし第三の位置を仮定する十分な論拠はないのでこれに従わず、他の分析を試みる。

Matsubara (1997) は先行研究を詳細に検討した結果、*by* 句は内項であると結論し、次のような構造を提案した。



Matsubara (1997) の先行研究批判は大筋では妥当である。しかし Matsubara の提案その

ものには二つの問題点がある。まず第一に、*by* 句が内項であるとする、*by* 句と (V の指定部に生成される) 外項が相容れないことをどのように説明するか分からないということ、そして第二に、*by* 句が内項であるとする、(5) と (6) のような文の文法性の相違が説明できないことである。

(5)a. *I take [to fix the lamp] upon myself.

Cf. I take upon myself [to fix the lamp].

b. *John said [to leave him alone] to Mary.

Cf. John said to Mary to leave him alone.

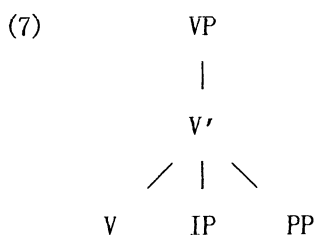
(Emonds (1970: 75))

(6)a. The doctor was ordered (to examine Mary) by John.

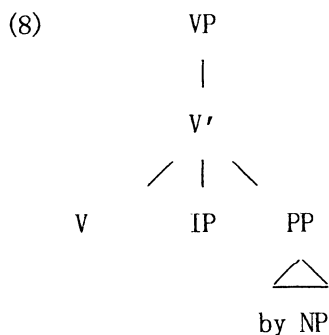
b. The doctor was asked (to examine Mary) by John.

(Kuno (1974 : 144))

(5a, b) は次のような構造をしていると考えられる。



また *by* 句が内項であるとする (6a, b) は同様に次のような構造をしていると考えられる。



Kuno (1973) の制約によると、もし *by* 句が内項であるとする (5) と (6) はどちらも非文となるはずである。

(9) The Internal NP Clause Constraint

Sentences containing an internal NP clause are ungrammatical. An NP clause is internal if it is neither the leftmost nor the rightmost constituent of its immediate parent node. (Kuno (1973: 375))

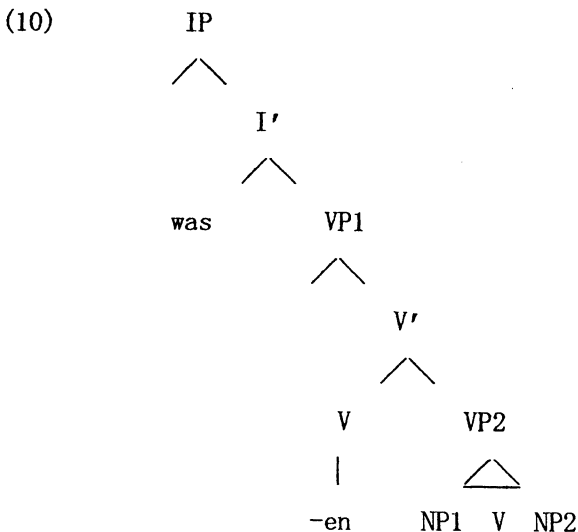
[間にはさまれた名詞句の制約]

ある名詞句は中間投射範疇(immediate parent node)の直接構成素として現れる場合(中間投射範疇に直接支配される場合)、その姉妹のうちで最も左に現れるか最も右に現れなければならない。さもなければその構造を持つ文は非文法的となる。

従って *by* 句は内項でないといえる。

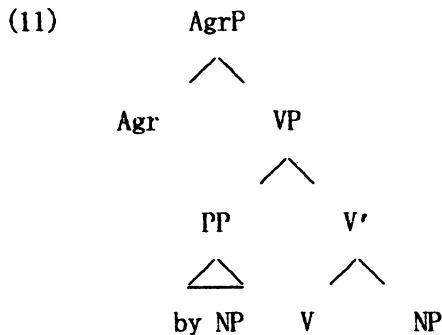
3. *by* 句を外項とする分析

Hasegawa (1988) は、受動文の基底構造は(10)であると考え、NP2 が VP の指定部を経て IP の指定部に移動し、NP1 に *by* が挿入され、*by* 句が形成されると考えた。



ミニマリスト・プログラムでは *by* の挿入は許されないから、Hasegawa の *by* 句の分析をそのまま採用することはできない。

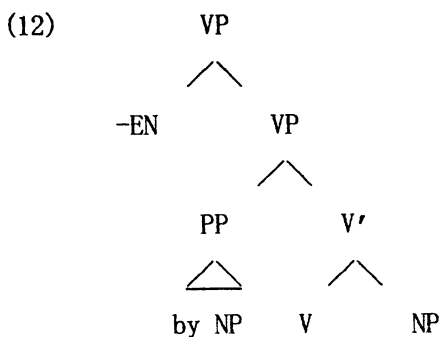
Watanabe (1996) は *by* 句が V の指定部に生成されると考え、(11)のような構造を提案している。



一つの問題点は、この構造から受動文を生成するためには Agr が強い素性を持っていると考えなくてはならないことである。

4. 代案と関連する問題

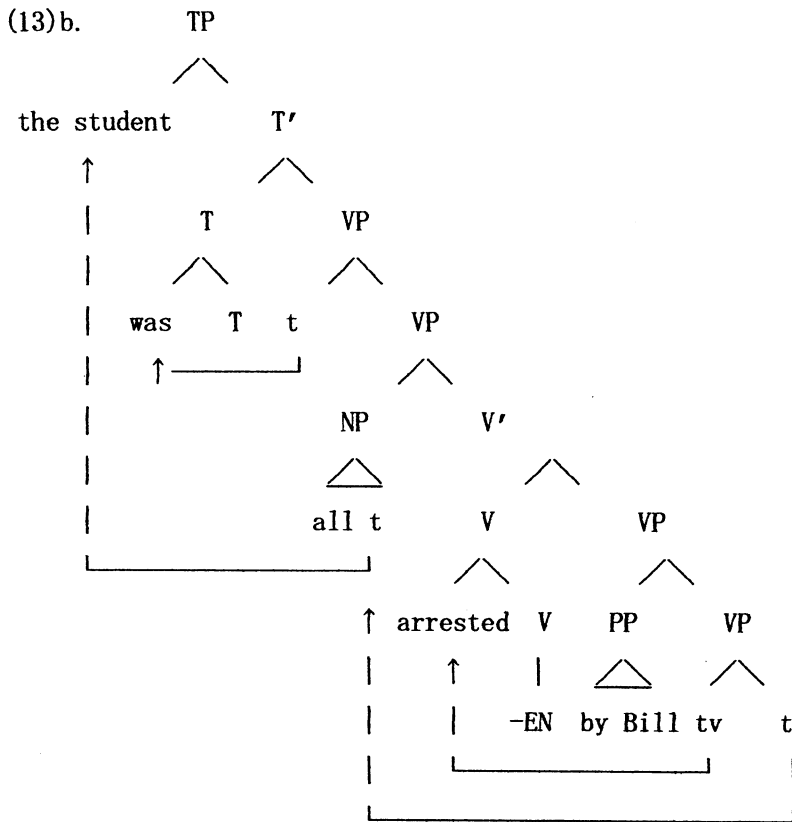
本稿では、Chomsky (1995)の「Agr は存在しない」という仮定に従い、受動文に次のような構造を提案した。



Lasnik (1995)に従い、抽象的受動形態素-EN が随意的に強い素性を持っていると考えることによって、V が-EN に繰り上げられ、NP が-EN の指定部に移動し、次に TP の指定部に移動して受動文が生成されることになる。

この分析の利点は、受身動詞が強い素性を持っていると仮定しなくても(13a)のような文で *all* が *the students* を修飾するという事実に自然な説明を与えることができることである。(13a)の構造が(13b)である。

(13)a. The students were all arrested.



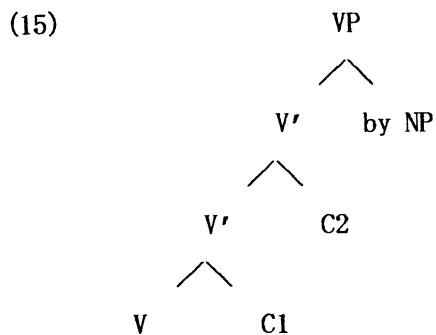
さらに英語の *seem* が強い素性を持っていてフランス語の *sembler* が強い素性を持っていないと仮定することによって(14a)と(14b)の文法性の相違を説明できる。

- (14)a. $They_i$ T [_{VP} t_i [_V *seem* v] [_{VP} [_{PP} to him] [_V, t_v [t_i to like John]]]].
- b. * $Jean_i$ T [_{VP} [_V *sembler* v] [_{VP} [_{PP} à Marie] [_V, t_v [t_i avoir du talent]]]].
- Jean seems to Marie to have talent
- 'Jean seems to Marie to have talent'
- (Chomsky (1995: 305))

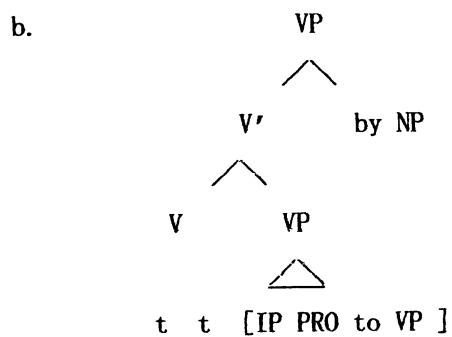
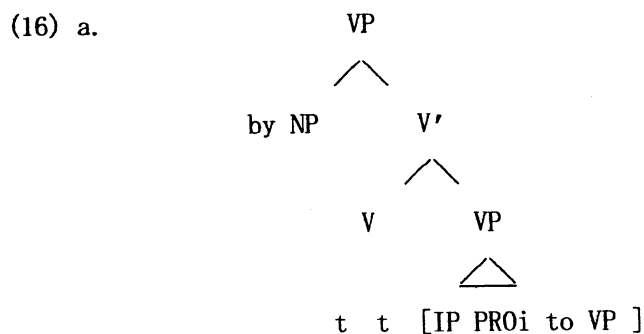
(14a)の $They_i$ の移動は *seem* の強い素性に引きつけられて起こるが、(14b)では *sembler* が強い素性を持っていないので $Jean_i$ の移動は許されない。

受動文で *by* 句が現れる場合、動詞の種類によって *by* 句が動詞の左側の指定部に生成されるか、右側の指定部に生成されるかに関して、次のように示される。

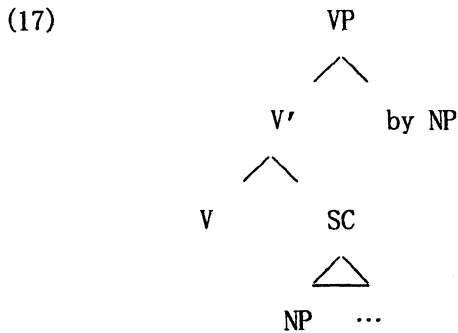
- (i) 三項動詞の受動文は *by* 句が右側の VP 指定部に生成されなければならない。



(ii) 三項動詞で一つの項が不定詞の場合、*by* 句は（左側だけでなく）右側の VP 指定部にも生成されねばならない。



(iii) 項が小節である受動文は *by* 句が右側の VP 指定部に生成されなければならない。



5. まとめ

本稿の議論が正しいとすると、結論として次のことが言える。

1. 受動文の *by* 句は動詞の外項である。
2. 抽象的受動形態素-EN は対格付与素性を照合する素性を持ち、内項移動を引き起こす強い素性を随意的に持っている。
3. Chomsky の「強い素性は非実質範疇に限定される」という仮定は多少修正する必要がある。

参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation*. Chicago : University of Chicago Press.
- Baker, Mark, Kyle Johnson and Ian Roberts (1989) "Passive Arguments Raised".
Linguistic Inquiry 20 : 219-251.
- Baltin, Mark and Paul M. Postal (1996) "More on Reanalysis Hypotheses". *Linguistic Inquiry* 27 : 127-145.
- Boskovic, Zeljko (1995) *Principles of Economy in Nonfinite Complementation*, Doctoral dissertation, MIT.
- Boskovic, Zeljko (1996) "Selection and the Categorical Status of Infinitival Complements", *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 269-304.
- Branigan, Philip (1992) *Subjects and Complementizers*. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Dordrecht : Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Chomsky, Noam (1993) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. Hale and Keyser.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Emonds, Joseph E. (1970) *Root and Structure - Preserving Transformations* Doctoral dissertation, MIT. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club. (The page reference is to the version reproduced by the Indiana University Linguistics

Club.)

- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Hasegawa, Nobuko (1988) "Passives, Verb Raising, and the Affectedness Condition." *Proceedings of WCCFL 7*, 99-113.
- Hornstein, Norbert (1995) *Logical Form : from GB to minimalism*. Cambridge, Mass. : Blackwell
- Jackendoff, Ray (1990) "On Larson's Treatment of the Double Object Construction." *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.
- Jaeggli, Osvaldo (1986) "Passive." *Linguistic Inquiry* 17 : 587-633.
- Kuno, Susumu (1973) "Constraints on Internal Clauses and Conjunctions." *Linguistic Inquiry* 4 : 363-385.
- Kuno, Susumu (1974) "The Position of Relative Clauses and Conjunctions." *Linguistic Inquiry* 5 : 117-136.
- Kuno, Susumu (1974) "Squibs and Discussion A Note on Subject Raising." *Linguistic Inquiry* 5 : 137-144.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction." *Linguistic Inquiry* 19 : 335-391
- Larson, Richard K. (1991) "Promise and the Theory of Control." *Linguistic Inquiry* 22 : 103-139.
- Lasnik, Howard (1995) "Case and Expletives Revisited : On Greed and Other Human Failings." *Linguistic Inquiry* 26 : 615-633.
- Matsubara, Fuminori (1997) *Studies in Argument Structure*. Doctoral dissertation. Yasuda Women's University.
- Maxwell, Michael (1987) "Against For-Deletion." *Linguistic Analysis* 17 : 43-77.
- Mihailovic, Ljiljana (1966) "The Agent in the English Passive". *English Language Teaching* 20, 123-126.
- Postal, Paul M. (1986) *Studies of Passive Clauses*. Albany. : State University of New York Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar*. Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (1997) *Syntactic theory and the structure of English A minimalist approach*. Cambridge University Press.
- Riemsdijk, Henk van and Edwin Williams (1986) *Introduction to the Theory of Grammar*.

- Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Roeper, Thomas (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation." *Linguistic Inquiry* 18 : 267-310.
- Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure." *Linguistic Inquiry* 19 : 425-449.
- Stowell, Tim (1983) "Subjects across Categories." *The Linguistic Review* 2, 285-312.
- Travis, Lisa (1984) *Parameters and Effects of Word Order Variation*. Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira (1993) *Agr-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System*. Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira (1996) *Case absorption and WH-agreement*. Dordrecht, Boston. : Kluwer Academic Publishers.
- Williams, Edwin (1985) "PRO and Subject of NP". *Natural Language and Linguistic Theory* 3 : 297-315.
- Zubizarreta, Maria Luisa (1985) "The Relation between Morphology and Morphosyntax : The Case of Romance Causatives." *Linguistic Inquiry* 16 : 247-289.